

<寄稿要項> 『孔子』と『論語』（読書・映画・音楽）

片方, 真佐子 / KATAGATA, Masako

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

54

(開始ページ / Start Page)

120

(終了ページ / End Page)

120

(発行年 / Year)

1996-07-13

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019912>

『孔子』と『論語』

片方 真佐子

古典を読むのは古い時代に生きた友との対話を楽しむためだ。

井上靖の「孔子」と下村湖人の「論語物語」を意識的に続けて読んだ。ともに印象深く感じられたのはやはり、孔子の弟子に放つ教訓である。それは恐ろしいくらいに冷静で厳しい。そしてまた、どれも現代に生きている私の心にも響き反省させられるのである。

お金が無いとか勉強がはかどらないとか腹の立つ人間関係とかいらいらが積もったりした時、周囲にあたりたりしてしまふ自分を「こんな状況なら誰だって…」と自己弁護してしまふ、そんな時

君子、固より窮す。

小人、窮すれば斯に濫る。

(『孔子』 井上靖)

こんな言葉を投げかけられてはつとす。人間というのは、私が思うに本当は、正しい意志を持つことのできるものであって、な

おかつその意志によってプライド高く行動し生きてゆくことのできる強さを備えている。

いろいろな感情を持つことのできるのも人間だけれども、それを抑えたり考えて行動したりできる強さも信じられるべきだ、と思う。

自分が生きている世界が犯罪や災害や政治の乱れや、または自己に対する嫌悪などあらゆる嫌なもの満ちている、と感じて逃げようか、それとも敢えて立ち向かうか、極端

な前者の最も悲しい途が自殺であると思うが、人間は後者の途をとる強さを本当は備えていることを信じるべきだ、と私は思うのである。そして孔子はまさにそういう人であつ

たと私は思うのである。

春秋戦国の時代に出て、隠者にかかわれた時、山に籠もるのはた易いが、人間は人間の中で生きられずはどうして草木や動物に混って生きられようか、と言った。孔子は誰よりも世の乱れを知りつつ敢えてその中で必死に生きること天命と自覚したのである。

「孔子」と「論語物語」はそんな孔子の教えを分かりやすく導いてくれ、孔子の言葉はこれらの本を媒介に私を励ましてくれたのである。

(4年E組)

『誌要』53号

「白峯呟言」を読んで

中島 樹美江

以前に、上田秋成『雨月物語』の授業を受けたことがあり、その時に「巻一・白峯」について学びました。そういった理由で日暮聖助教授の「白峯呟言」は大変興味深い論文でありました。

西行と崇徳院との論争については、秋成が西行に自らの国学思想を代弁させているという説や、西行が理性ある苦悩の救済者であつて、新院が苦悩する者であるとみる説などがあります。しかし、この論文では、秋成は両者の論争を介して読者に「皇位継承」についての問題を投げかけているとしています。このように論ずるにあたって、西行は皇位継承について従来の血のつながりによる日本国の皇位継承法を支持していて、他方で崇徳院は「天皇(人)としてあるべき姿」と「武力によ